



信友会会報

2009年5月

<<4月例会より>>

信友会の今年度は阿佐ヶ谷教会創立 85 周年とプロテスタント日本伝道 150 年に関連する学びを続けます。

4 月例会は世界的な経済システムの破綻と不況の中で私たちキリスト者の立ち位置を求めるため、「旧約聖書における危機の時代に学ぶ」のシリーズ第 1 回を森澤弘雅兄に語っていただきました。

信友会 4月例会

旧約聖書における危機の時代に学ぶ(その1)

森澤 弘雅

1. 旧約聖書の特質

いま司会者に読んでいただいたエレミヤ書 31 章 31 節以下には、神の律法についての契約のことが記されており、これは契約の内容の違いではなく、結ばれ方の違いが表されており、古い契約はモーセを通して二枚の石の板に神の律法が書き記され民に示されました。すなわち、書かれた文字を通して結ばれた契約。

エレミヤが予告する新しい契約とは、石の板ではなく、人の「胸の中に」授けられ、「心に」記される契約であります。

石の板は、神の意思が人間の心の外に置かれている。そこで人間は自分の心を神の意思に合わせなければならない。この困難さのゆえに、人間はしばしば神の言葉に対して不忠実でありました。そこで新しい契約は、神の律法を人間の心に直接刻み込んでしまおうと意図されたのです。

従ってここで言う新しいとは、古いものを廃絶してしまうというのではなく、それを完成させたものなのです。これに関連して第 2 コリント 3 - 6 に「新しい契約」3 14 に「古い契約」という言葉があり、ここから新約・旧約という呼び方が発生しました。



エレミヤは「契約」について人間を救おうとする神のご意思と捉えております。

旧約聖書が延々と今日まで世界中で読み継がれているのは、この書を単に古代イスラエルの歴史記録としてのみ捉えているのではなく、現代の私たちの身近な、直接的な生き方、社会とのかかわり方などが、神の教えを通して語られているからです。

アブラハムに始まりヤコブ、イスラエルに続く歴史上の出来事を通して示された神の意思を、世界の人類が信頼することが人類の救いにつながるわけであり、そのモデル、サンプルとしてイスラエルの民はたまたま選ばれました。この民は、具体的な出来事によって神の救いの意思を全世界に示すために選ばれた民であり、救いを示す「器」としての民であって、決して優秀さのゆえに選ばれたエリートではありません。それは、弱く小さな民族である必要があった。エジプトやアッシリアなど大国ではなかったのです。

イスラエルの民はたまたま選ばれました。この民は、具体的な出来事によって神の救いの意思を全世界に示すために選ばれた民であり、救いを示す「器」としての民であって、決して優秀さのゆえに選ばれたエリートではありません。それは、弱く小さな民族である必要があった。エジプトやアッシリアなど大国ではなかったのです。

聖書は最初ヘブライ語で書かれていましたが、創世記の原典はバビロン捕囚帰還後すなわち前 400 年代に書かれたとされます。イエスの時代に読まれていた聖書は、前 280 年ごろに編纂されたギリシア語の七十人訳聖書です。一部ユダヤ民族がヘブライ語正典として完成された時期はかなり遅く、紀元 90 年代。ローマ軍によってエルサレム神殿が破壊されたあと、ユダヤ人のヤムニの宗教会議で、ユダヤ教再建のために確立されました。モーセ五書の確認と、イエス・キリストをメシアとする新約聖書の否定を決定しました。

2. ダビデ

(1) サムエル記より

士師記に続く物語がサムエル記です。士師とは、部族連合体イスラエル人の軍事指導者、裁判官。また神の意思を伝える預言者でもあります。最後の士師がサムエル。

サムエル記に入ると、ここで物語は、部族連合体から王制国家に移行していく有様が描かれます。民衆は常備軍とそれを率いる王を求めた。なぜなら、周辺の異教の部族たちが絶えず、イスラエルの民を襲い、略奪を繰り返しました。彼らはすでに王制を敷いており軍事も強力だったのです。

ヨシュア記から士師記に移っていく過程で、十二部族にそれぞれの土地が与えられていきますが、やがて彼らは、バアルやアシュトレト、アシェラといったシドンとかフェニキアあたりの異郷の神々に仕え、主の目に悪とされる行ないをし始めます。ヨシュアの死後、イスラエル民族の過ちの萌芽が見られる。それはサムエルが感じていた不安でした。

まず王を求めることは、神の前では愚かなこと。本当に恐れ、従い、仕えるべきは唯一の神ではなかったのか。ここに預言者・先見者としてのサムエルの悩みがあったのですが、サムエルは、民衆の求めに応じてしびしび最小民族であるベニヤミン族出身のサウルに油を注いで王にします。ここでもサムエルは、正しい王の姿を願います。油を注いで神に仕える王、神の僕としての王となることを願ったのでした。

この課題は、**誰が神の御心に叶う指導者となるのか**という点に集約されております。

サムエル記上 8 章で、サムエルはサウルに油を注ぎながら、王制がもたらす弊害を列挙します。ここでは神に理想とされる王と、現実の王との落差が表現されており、この時代の背景が物語られております。

サウル王はときたま悪霊にとり付かれて精神を病んでいく。そうしたとき、豎琴を弾く若い羊飼いのダビデを迎え入れます。当時のサウル王最大の強敵はペリシテ人。ダビデはペリシテ側の巨人、身長 3 メートル近くもあるゴリアトを倒して勇名をとどろかせます。

このダビデはサウルの娘ミカルと結婚し、サウルの息子ヨナタンとも固い友情に結ばれていきます。しかしサウルは、ダビデが絶大な人気者となったことを妬み始め、ダビデ殺害を企てます。「サウルは千を撃ち、ダビデは万を討った」(18-7)という歌まで流行りだし、ますますサウルの怒りが増幅する。止む無くダビデは宮廷から逃亡して自らの軍団を編成していきます。

しかし、サムエル記の終盤ではダビデのサウル王に対する忠誠心が執拗に表現されております。詩篇の多くの詩は、ダビデが直接つくったものではないが、この作者は多くの詩をダビデの悩みと祈り、すなわちダビデの激しい悔い改めと信仰の深さに託して歌っています。サウルは、ペリシテ人との戦いに敗れて戦死しますが、その後イスラエルは混乱状態に陥り、実質的にはペリシテの支配下に入ります。

(2) ダビデの功罪

この間にダビデはユダの王になるのですが、ペリシテはこのことを容認している。

ダビデはサウルの部下たちの軍団とも戦って勝利するが、これもペリシテ側がダビデをうまく利用したものと推測されております。こうしてサウル王朝は崩壊していくのです。

そしてダビデは全イスラエルを統一する王として迎えられ、やがて強力な軍団を編成してペリシテ軍と対峙します。ダビデはそれまでエブス人の町であったエルサレムを陥落させて首都とし、ペリシテ人と戦って勝利を治めます。

かくして、権力基盤を固めたダビデは、「契約の箱」(神の箱)をエルサレムに運び入れました。

契約の箱とは、**神がイスラエルの民と共に在ることを象徴する聖なる箱**で、イスラエルの民が荒野を放浪し

ている間も運び歩いたもの。十戒すなわち神の律法が刻まれた二枚の板が収められておりました。一時はペリシテ人が戦利品として所持していたのです。

時に前 1000 年、こうしてエルサレムは、全イスラエルの政治と宗教の中心地となったのであります。

聖書は、ダビデを主のみこころに叶う人物と認め、彼の立てた王朝は永遠に続くとして神に約束されたと記しております。そのいっぽう、ダビデに関する記述は必ずしも彼を褒め称えるものばかりではありません。サムエル記下 11-2 に始まるウリヤの妻バト・シェバとの姦通のエピソードは有名です。そのためダビデは当時の著名な預言者ナタンの怒りを買って、神の報いを受けるのです。バト・シェバから生まれた長男いわば不義の子が死に、正妻の息子アムノンが、母親の違う妹のタマルを強姦し、タマルの兄に当たる、つまりダビデの息子のアブサロムが怒ってアムノンを殺す、といったダビデから見れば息子たち同士の悲しいがみあいが生じる。このアブサロム、本当はダビデが最も可愛がっていた息子でしたが、兄弟を殺した罪で父に罰せられると恐れたアブサロムは、エルサレムを逃れてヘブロンに行き、そこで王位を宣言したうえ、各地の王たちと結託して父ダビデを討とうと企てます。明白な謀反ですね。そして激戦の末アブサロムはダビデ軍の兵士に殺されてしまう。しかし、ダビデはここで大変悲しみを表明するのです。サムエル記下 19 章「ああ、アブサロム、アブサロム、なぜ死んだのか。わたしがお前に代わって死ねばよかったのに。」



この闘いを機にペリシテ人や、ダビデに反旗を翻してサウル王の残党一族に率いられた北の民族も反乱を起こします。結果的にダビデはこれらの敵を次々に破って、イスラエルとユダを統一していくのです。22 章の、ダビデがサウル王の一族やペリシテ人たちとの勝利を感謝して歌う歌は有名ですね。

「主はわたしの砦、岩、逃れ場、わたしの神、大岩、避けどころ……。」

ダビデは、これまでの自分の罪を激しく悔い、ひたすら祈り続けました。この祈りの歌が、後世の詩人がダビデの詩として詩篇にまとめております。

このダビデが、なぜ後世イエスの祖先として新約聖書につながっていくのかについては、士師記の後に続くルツ記にヒントが記されております。ダビデはエッサイの子、エッサイはオベドの子、オベドはボアズの子、ボアズはルツの夫であります。

ルツという女性は異教徒モアブ人でした。いろいろいきさつがあつてルツはベツレヘムに住むことになり、ここでボアズという信仰篤い実直な男（実はアブラハムから続く子孫でヨシュア記に登場するラハブという娼婦の息子）と結婚し、オベトという子供を生みます。この息子がエッサイ。つまり、ダビデは異教徒であるモアブ人のルツを曾祖母としてベツレヘムに生まれました。

ここに、神はご自身が選んだイスラエルの民だけではなく、異教徒であっても唯一の神を信ずる信仰の篤い人たちをも受け入れていくという、**主の愛の精神**が伝えられております。これが罪を犯しながらなお悔い改め、主を慕い信じていくダビデを、主の僕としてイエスに至る後世まで永遠に子孫をつなげていこうとする神の意図でもあったのです。

3. ソロモン

(1) 即位のいきさつ、知恵と栄華

さて、いよいよ列王記に入ります。1 章～11 章には、ソロモンの名声が余すところ無く描かれております。列王記のソロモンは、決して無条件な意味で聖人ではありません。冒頭では、年老いて衰弱したダビデ王の姿。何人かの息子は主の罰により若くして死んでおり、生き残った息子で最年長のアドニヤが王位継承をもくろんでおりました。

アドニヤの背後には軍司令官のヨアブと祭司アビアタルがついている。アドニヤは、エン・ロゲルの泉のほとりで王子たちや家臣を招いて、戴冠式のようなことを催しておりました。この出来事が預言者ナタンによってダビデに伝えられます。ナタンは宴に招かれた客が「アドニヤ王、万歳！」と叫んでいたと伝えます（上1 25）。

これをきっかけに、ナタン、祭司のツアドク、親衛隊長ベナヤを中心とするグループがソロモンの母であるバト・シェバと謀って、老いたダビデからソロモンを即位させる許しを得ます。そしてすぐに、エルサレム郊外のギボンの泉で即位の儀式が行われ、ツアドクがソロモンに油を注いで王にします（上1 39）。

ソロモンの治世には、近親者との争いからはじまっており、2章ではソロモンの最大のライバルだったアドニヤとアドニヤの後ろ盾となったヨアブが処刑されて、アビアダルはエルサレムから追放されたことが記されております。

ソロモンの業績については、3章から10章までに記されており、ソロモンが知恵を求めて神に祈りを捧げる話、その知恵を発揮して二人の女性が一人の子供を争うのを裁く（まるで大岡裁判？）話、王国の財政を立て直す話、神殿と宮殿の造営に関する話など。

さらに、ソロモンの富と知恵を聞いたシェバの女王が、アラビアの南西部（今のイエメンのあたり）から訪ねてくる話などが紹介されております。これら、ソロモンのプラス面の功績が語られている反面には、批判を下している部分も見られるのです。

6-38には、神殿の造営に7年もの歳月がかけられたこと。さらに7-1には宮殿の建設に13年の歳月がかけられたと記されています。

9章では、神がソロモンの夢に現れ、ソロモンとその子孫たちが神に背くことがあれば、神殿は廃墟と化すだろうと厳しい戒めを唱えております。

この話の直後に、ソロモンはガリラヤ地方の20の町（当然住民ともども）をティルス王ヒラムに贈ったと記されております。

ティルス王は、神殿と宮殿の造営に当って、ソロモンに資材と職人を提供した人物。ソロモンはその支払いに当って、イスラエルの土地の一部と住民を引き渡してしまったのです。11章では、ソロモンに対する最大の批判が語られております。

この章が終ると、物語はソロモンの死後、王国はユダとイスラエルに分割されるいきさつに移っていきます。

列王記によれば、**ソロモンが犯した最大の罪は宗教上の罪**であります。ソロモンは異国から迎え入れた女性たちに惑わされて、異教の神々を崇めるようになり、その神々のために祭壇まで築いてしまう。十戒に対する重大な背信行為ですね。

神は、その罰として、異邦人の指導者たちにイスラエルに反旗を翻えさせ、ソロモン王国は分裂の道をたどるようになります。

さらに、それ以上に深刻だったのはイスラエル内部から敵が現れたこと。

エフライム族出身で、その領地でエフライム族とマナセ族の強制労働者の監督を務めるヤロブアムは有能な人物でしたが、彼はあるとき預言者アヒヤから神の言葉が告げられる。

11章31~32「主はこう言われる『わたしはソロモンの手から王国を裂いて取り上げ、十の部族をあなたに与える。ただ一部族だけは、わたしの僕ダビデのゆえにソロモンのものとする』」。

ヤロブアムはこの言葉に従って謀反を起こしますが、逆にソロモンに殺されそうになってエジプトに亡命するのです。

（2）ソロモンの評価

わたしたちが学んできたソロモン像は「知恵と栄華」でしたが、以上の物語からはそれ以外の部分が多分にいま見られます。ソロモンは、イスラエルをゆるやかな部族同盟だったものから中央集権型の小国家へと変貌させました。ソロモンの野心的な事業の数々も、重い負担となって民衆の肩にのしかかっていたと想像されるわけです（9章20~21）。

聖書の歴史観や考古学的研究では、ソロモンについてまだまだ解明されていない部分が多く、学説もいろいろ

る分裂しております。ソロモンの治世に関する研究では、ソロモンが王国の民に取った政策に対し、研究者たちの厳しい批判が向けられております。

5章12節では、ソロモンの知恵について、三千の格言を語り、千五首の歌をつくったと記されております。ここから、「箴言」の作者はソロモンだとする伝承が生まれました。ちなみに、青春の喜びをうたった「雅歌」はソロモンの若い時代の作、「コヘレトの言葉」は晩年に近い悟りの境地をきわめて文学的かつ哲学的に語った名言集とされております。

ソロモンは、建造物の造営には優れていましたが、それによって民衆の離反も招いたようです。また、外国にまで評判の伝わった豊富な富の蓄積についても、王国の民に過酷な苦役を強いて獲得したものだたとされております。



ソロモンが、史上稀有の知恵者で、賢明な王としての資質もあつたらうと想像される一方で、そのことは別として、国民の困窮を招いたという矛盾にまで気づいていなかったのではないのでしょうか。また、この矛盾が将来どのような結果を招くかも予知する知力までは持ち合わせなかったといえます。ソロモンの死後、イスラエル統一王国は南北に分裂し、その後再び統一されることはありませんでした。

エジプトに亡命したヤロブアムのその後の話と、分裂した北イスラエルの興亡、王たちの事跡、さらに北イスラエルよりも約130年長く生き延びた南ユダの盛

衰等については、次回以降シリーズとして皆さんで語り合い、勉強していくことにいたしましょう。

いずれにせよ、王位に就いた北イスラエル初代王は、シケムとベヌエルの町を築いたのち、金の子牛像を二体作りベテルとダンに安置するという、いわば偶像礼拝の罪を犯したのです(12章28)。

4. 偶像礼拝の罪とは

ホセア書13章4～6節を読んでみます。

エジプトの地からイスラエルを導いた神は、乾ききった荒れ野でも、彼らのいのちに心を配られました。しかし、神が導くと約束した肥沃なカナンの地に入り、養われると腹が満ちて高慢になり、命の与え主を忘れ去っていった。神は約束を果たしたが、民は忘れてしまうという皮肉な現実にホセアは驚き、嘆きます。

豊かさを必死に追い求めるイスラエル、すなわち私たちの多くは、欲に目がくらみ、豊かさの与え主が誰かを忘れてしまって、バアルへの道にいそいそと走っていく。これが偶像礼拝であります。

偶像は、神を現す像。しかし、偶像イコール神ではありません。偶像は、神の秘密を探るための造形であり、手段の道具に過ぎません。

人は像を造り、神の秘密の源泉を捜し求めて、それを利用して自分の欲望を充足させようと願い、その像に向かって祈り捧ぐ。

聖書が否定し、忌み嫌う偶像礼拝とは、像そのものではなく、**自己の欲望を最優先させようとする人間の生きかた、行動**であって、そこで唯一の主なる神を忘却することなのです。そこでは、命の与え主を忘れ去り、本当の信仰を捨てて物質的な豊かさや快適さを追求する生き方を選択してしまう。要するに、偶像とは神によるのではなく、人間の思い描く価値観の投影に過ぎないものなのです。

個人的な見解ですが、日本は信仰を持たない国民として文明国中ワースト・ワンです。これは欧米に比べて、子供のころから宗教とか、神に対する信仰の大切さといった教育がほとんどなされていないこと。子供たちの心に、命の与え主は誰なのか、今日の恵は誰から与えられたのかといった発想をさせることなく、多くの若者たちが学校教育を終えて、自己中心の人間として社会に加わっていく姿をみます。

こうして育った国民のなかの一部でしょうが、今度は彼らの不正・不道德な行ない、誤った生き様などが「主の目に悪とされている」のではないのでしょうか。